

兵庫県下のウスバシロチョウについて (1)

山 本 広 一 ※

ウスバシロチョウ (*Parnassius glacialis* BUTLER, 1866) は北海道 (南西部及び南部)・本州・四国に産し、九州からは知られない。かつては“日光白蝶”の名で呼ばれ、シロチョウを思わせるような蝶である。局地性が著しく、平地では5月中旬頃から現われて山裾の草原や谷間などに群飛する。飛翔が緩かなので採集しやすく、花を訪れた場合は手づかみすることも難しくない。氷河時代の遺物といわれ、生活上他のアゲハ類と異なるところが多く、また、地理的な変異が大きいいためその分類的取扱いは今後の課題として残されている。

1. 兵庫県下における分布と採集記録

ウスバシロチョウは本県の西域と中部以北の山間部に多く、現在では佐用郡上月町が分布の南限とされている。しかし、こうした地方は訪れるのに便利が悪く、発生地の詳細をつかむことが難しい。ことに但馬・丹波の北部では調査が行きとどかなく、資料は皆無の現状にある。

本県にこの蝶が獲られた記録は古く、中国路にあっては鳥取県 (1906年) に次ぐものであり、BRYK, EISNER 両氏も 1932年 *ssp. mikado* を記載するにあたって、“Harima”産を type としたようである。しかし、それがどの地方で採集されたものであったかは判らない。

さて、井口宗平氏 (1908) は1908年5月11日佐用郡久崎村榎田の西方2里ばかりの所で“瞬時にして採集函に満つる”ばかりの個体を採集した。これが本県では最初の記録である。だが、その採集地については“播磨の西端にありて、美作の国境に近接し、瀬戸内海を距る事九里余山間といへ高山らしきものはあらざる也”と説明し、地名は明記しなかった。しかし、その位置を地図上にもとめると、そこはどうかや西庄村の西域か久崎村の北西部のようである。

その後何年か経て、筆者にはその“西播”の地が久崎村ではないかという気がしはじめた。というのは1930年筆者が小林桂助氏を訪ねたとき、同氏が所蔵される標本中に高見筆太郎氏が採集した“久崎産”の2♂♂ (V~VI, 1929) と2♀♀ (10~VI, 1929) があったからである (第1図)。そのため、1934年以降筆者は何度となく久

崎村を訪れた。だが、いつも失敗に帰し、その在り家を突きとめることは出来なかった。



第 1 図

佐用郡上月町産; 10~VI, 1929;

高見筆太郎氏採集; 小林桂助氏所蔵

ところが、後年井口氏 (1950) はそれが“西庄村の西大島と小日内と両部落の近辺山裾”であったことを明らかにし、また、“石井村にも居るように思うが……”と石井村での発生を予想した。しかし、久崎村についてはまったく触れなかったのである。そして最近筆者にも“この蝶は西大島付近の一地点に限って見られ、……大日山川沿いの草原に低く群飛しておった”と当時の追懐談とともに発生地の見取図をも示された。そして“高見氏にも発生地を教えてやったので、その後高見氏は西大島で採集しておった”と話されていた (井口氏私信, 1968)。したがって、小林氏の許にある4頭も高見氏がその後新しい発生地を見つけていない限り“西庄村”のものであったに違いない。西庄村の小日山は小川を距てて久崎村大日山と境する隣接の地なのである。

ついで松井俊公氏 (1953) は佐用郡の西域で2頭を採集し、他に多数を目撃した旨を記録した。だが、採集場所は“西域”だけではっきりとしてないが筆者はこれも西大島付近と思っている。西大島は竜野・佐用から岡山県津山に通じる国道179号線の途中にあり、氏が生前しばしば通ったことは想像するに難くない。それに佐用郡下で確実に採集出来る場所はといえば、今日もここ以外に知られないのである。

その後佐用郡と宍粟郡との境にある日名倉山麓 (おそ

らく実粟郡側であろう)から見つかった。したがって旧石井村(佐用町)や船越山麓(南光町)辺りにはいると思うがいまだ採集された記録がなく、尾崎勇氏は石井の南5km許りの平福や豊福にも見られないと言っている。

実粟郡は播磨地方におけるこの蝶の宝庫である。しかし、これが明らかにされたのは比較的新しく、1940年5月20日筆者が三方村高野(一宮町)で獲たのが最初であろう。山間のだんだん島に少なくとも、翅脈異常型を2頭も採集した。だが、その後に訪れる者がなかったとみえ、三方地方からの消息は絶えていた。ところが最近岩村敏氏(1968)は上岸田より富山越えに東公文に入り、この付近一帯に広く分布することを確めた。なかでも“横山部落に至る左手の急斜面には極めて多産”するようである。ついで氏は山崎町蔦沢を訪れて岩上神社付近に少なくないことを記録した。

また、これと谷を異にする引原川の川筋にはこの蝶が至る所に発生する。しかし、1945年頃筆者がしばしば訪ねた奥谷村の引原(波賀町)は1955年引原ダムの完成により音水湖の湖底に没して今は無く、採集はもっぱら赤西・音水の溪谷で行なわれている。もちろん、はるか下手の上野付近にもいるのであろうが現在確実なのは原(波賀町)より北の場所である。この辺りでは5月10日過ぎから現われて17~8日頃に盛期を迎え、下旬になると減少する。

引原川を上りつめると戸倉に出る。戸倉は鳥取県と境するさい果ての僻地とて、かつては採集に出かける者もなかったが、国道29号線が開通してからは訪れやすくなり、1967年5月18日尾崎勇氏はこの地で3頭を採集し、吉阪道雄氏(一V.1967)・唐土洋一氏(21-V, 1967)らも出かけたと聞いている。また、筆者も1967~1968年久方ぶりにこの地を訪ね、村内に広く発生することを確めた。実粟郡の北部では発生するのがやや遅く、筆者が1967年5月29日に獲たものはすべてが新しい個体であり、1968年5月21日には見かけた数が多くなり、発生は初期であるかのように思われた。

揖保川の西、千種川の上流にもいくつかの産地がある。1967年5月14日唐土洋一氏は千種町河内で約20頭を採集し、同年5月17日岩村敏氏も西河内で多数を獲て、その1部を筆者の許に寄せられた。

中播磨地方での産地として知られているのは飾磨郡夢前町の雪彦山である。1951年田口幸夫氏は坂根付近で3頭を採集し、1952年5月12日筆者(1954)は山麓の谷間に多いことを確めた。そして毎年出かけて50~60頭ばかり採集した。しかし、1955年頃より急に減少し、今では山裾の坂根にしか見られない。しかも見かける範囲はきわめて狭く、個体数が稀である。県下で最も早く発生し、は5月早々に現われる。そのため5月半ばが採集

の適期であり、(♀はやや遅れる)、下旬になると完全な個体は採れ難い。なお、この地の♀がとくに黒化していることは注目すべきことである。(第2図)。



第2図

飾磨郡雪山産; 26-V, 1957; 筆者採集・所蔵

その後坂根より寺前が出る間道からも獲られたが、尾崎勇氏の調査によると、これより南方5kmの河原谷(夢前町)にも見られないとのこと、雪彦山の南麓がこの地方における分布の南限ではないかと思われる。

加古川流域の東播磨地方や上流の氷上郡下には知られない。これらの地域はこれまでも相当精しく調べられているだけに今後の発見は難しく、おそらく生息しないものと私考する。

但馬地方には広く分布するに違いはないが、現在判っているのは鳥取県境付近と南但の一部に限られており、今後に期待する他はない。

1953年筆者は養父郡西谷村(大屋町)に西谷裕之氏を訪ね、その際同氏が同村栗ノ下・横行間で採集していた数頭の標本(下旬-V, 1953)を頂いた。そして、その翌年氏から横行付近に多いことを知らされた。1日に100頭ぐらいの採集は至難なことでないという。ついで1956年5月下旬中尾淳三氏は同じく佐佐見の谷から採集した。しかし、林道が開発されてから減少したかのように聞いている。西谷の地は南を実粟郡波賀町と境を接し、この山間部には各所に発生地があるに違いない。また、須賀ノ山の東尾根を北に越えると八木川の谷筋があり、これを遡ると旧美方郡熊次村(養父郡関宮町)がある。筆者(1955)は須賀ノ山(氷ノ山)を中心に1937年以来蒐めた採集品を整理してこの地方の蝶相を紹介したが、その際守本陸也氏から贈られた本種について付言した。爾来この地に蝶を探ねる者がふえ、この蝶が鉢高原の山麓に豊かなことが判明した。福定・丹戸・大久保などの山際に発生するさまはまったく眼を見張る他はない。この辺りでは発生するのがやや遅く、6月も早々なら完全な♂が採集され、生きのびき♀が6月下旬に獲られた例もある。

鉢伏山の北西約10kmの扇山にも多産する。鳥取県側か

らは雨滝産が早くも1906年に記録されたが、本県側では1955年奥谷楨一氏によって紹介されたのが最初である。奥谷氏（1955）によると、菅原・和光付近には少なくないとのこと、氏はまた“岸田川に沿って田中に入り…、すこし奥の青下あたりから最も奥の菅原（550m）・畑ヶ原高原（900～1,000m）に産する”との教示を下された（私信，1966）。扇山産にはとくに黒化する傾向がいちじるしく、♀のなかには翅全体が黒くなり、前翅の中室紋さえ識別出来ないものも稀でない（第3図）。



第 3 図
美方郡扇山産；12-VI, 1963；
辻啓介氏採集・筆者所蔵

また、山本茂信氏からの教示によると、この岸田川の流域にあたる浜坂町にも田谷に限って見られるとのことである（私信，1964）。

1956年筆者は播丹線新井より神子畑の谷（朝来郡朝来町）に入り、精錬所付近よりさらに奥の谷間に少なくないことを知り、また、途中で出会ったある農大生の方から新井近くにもいるとの話を聞いた。この辺りの個体は比較的黑みが乏しいようで、後翅内縁部に黒色斑を欠いたものもある（第4図）。



第 4 図
朝来郡神子畑産；14-V, 1961；筆者採集・所蔵

なお、播但線以東の播磨・但馬には従来この種の記録がなかったようである。ところが最近和田山町竹ノ内方面に産することが細見坦司氏のメモ（1967）から判明し、

青倉山麓あたりにも生息するのでないかと推測する。

神子畑の南に田路の谷がある。奥田路付近には少なくないようであり、1967年5月21日尾崎勇氏らはこの谷を遡って実栗郡一宮町千町へと出で、その間約80頭を獲たという。

しかし、この谷の南5kmにあたる栃原谷（朝来郡生野町）には産しない。長年この地にあつて調査を続けている西村公夫氏（1967）は1962年5月中旬に1度目撃したのみといい、近くの発生地から迷い混んで来たのであろうと語っている。ところが栃原の南西4kmの川上や、さらにその南西5km余りの上小田（ともに神崎郡大河内町）には採集されているらしいので、ここに分布上の空白地帯が出来たわけである。

この他日本海近く城崎方面にも産すると聞いてはいるが、その詳細は判らない。



最後に興味深い問題は六甲山麓におけるこの蝶である。1953年夏の休暇明け、高見裕氏（1953）は生徒たちから提出された作品中にこの蝶があるのを見つけ、その由を記したが、富士原芳久氏（1953）はこれを六甲山から獲た最初のものであろうと報告した。ところが、吉阪道雄氏（1953）は“矢野文彦氏のご教示によると以前六甲山麓において多数採集されていた由”と発表し、話題を呼んだことがある。高見氏は標本の提出者から採集当時の様子を詳しく訊したが確かな答は得られなく、けっきょく他の地で採集された標本が六甲産であるかのように擬装され、提出されていたものと思われる。その後吉阪氏（1958）は“六甲山には大正年間までその発生が

認められたらしく……矢野文彦氏の所蔵標本中には同地産の個体があった”と詳記した。当時筆者はこれを異としたが、思えば不審な点がないでもない。仮に“大正年間”を大正末期とみても40余年の昔であり、六甲が武庫郡六甲村と呼ばれておった頃である。したがって、矢野氏が他の誰かからその標本を入手されない限りご所蔵は難しかったものと思える。また、一口に六甲山といっても範囲が広く、それがどの辺りを指すのか判らない。六甲山頂付近のこととは思えぬし、表六甲の山麓にはそうした話を聞いたことがない。そのため、筆者(1967)はおそらく裏六甲の有馬付近であろうと憶測した。

ところが、このほど(1967年)矢野文彦氏に直接お尋ねする機会を得て、“昭和12~13年頃かなり採集されていたらしく、場所は誰もが登山路としていた“阪急六甲”から“土橋”を経由する篠原町一帯であった”との意味のご回答を頂いた。つまり、吉阪氏は“昭和”を“大正”と思いをしていたのである。しかし、それにしても篠原町は小林桂助氏がお住いの場所であり、昭和12~13年頃といえば氏が蝶や甲虫の研究に活躍されていた頃である。もっともこれより前小林氏(1930)はオムラサキやウスバシロチョウが“今後詳しく探せば或いは採集されるかも分らない”と述べてはいるが、氏のお膝下にあつてこれが全然お眼にとまらなかつたとはよくよく稀なものであつたに違いない。しかも“以前にかなり採れた”とあつては変である。

ついで筆者は矢野氏の標本が阪口浩平氏の許にあるかのように聞いたので同氏にお尋ねすることとした。阪口氏はさっそく矢野氏に連絡下さつて“標本は私方になく、矢野氏の御宅にもないようです。採集地は六甲ケーブル下の駅〔土橋〕とかつて存在した六甲ロープウェイ駅(これも下の)との中間位の所だそうで、数頭だけ(恐らく2~3頭)採集された由です。採集年月日はご記憶なく、戦前恐らく昭和16~18年頃だとのこと”と詳細なご教示を下さつた。そして、氏もまた“その後この蝶の出現期には探しに出かけたが目撃もしませんでした”とのことである。

その後六甲は大きく姿を変えた。そのため、今後この地に見つかる可能性はきわめて淡く、蝶は多くの人たちに知られぬうちに絶滅した。だが、その原因は判らない。ある者は昭和13年(1938)この地を襲った大豪雨がもたらした結果ではなからうかとも語っている。しかし、阪口氏からの教示のように昭和16~18年(1941~1943)頃にも蝶がおつたとなれば水害とは関係なく、仮に昭和12~13年(1937~1938)頃の話であつたとしても、これを単なる水害による影響とのみ受け取ることは難しい。また、その頃の六甲山麓はしきりと開発が進められ、ダイセンシジミの発見されたクスギ林もすでに失われていたが、土橋辺りまで蝶の生存を脅かすほどに開けていたかは疑問である。とにかく溘然と現われ、忽然と消え去つた蝶であり、まったく記録的な存在としかいへない。

ところで、これとはやや趣を異にするが雪彦山でも蝶が急に減少し、絶滅(?)したことがある。雪彦山についてはすでに記したとおり、1952年頃蝶は登山路を少し登つた木馬路付近に移しく、1日数十頭の採集は容易であつた。それが1955年頃より急速に減少し、この地に多いと聞いて訪れた採集者を落胆させたものである。しかも、その減少が採集の結果でないことは、この間の消息をよく知る筆者には断言できることであり、原因はもっと他にありらしい。私どもは新しい発生地を探さずだけでなく、発生地における年々の発生状況を明らかにし、その盛衰につながる何かを突きとめたいものである。そうすればこの蝶の分布を左右する要因のいくつかが解明できるのではないかと考える。

以上は筆者が現在までに蒐めた分布についての資料であり、別表の分布概念図はこれにもとづいて作成したものである。

ここにこの前編を終えるに際し、貴重な標本や資料をご提供下さつた井口宗平・岩村巖・小林桂助・奥谷禎一・坂口浩平・辻啓介・尾崎勇・山本茂信・矢野文彦各氏に対し、また上梓に当り一方ならぬご高配を賜つた室井紳氏に厚くお礼を申し上げたい。(未完)

文 献

- 井口宗平(1908), 日光白蝶西播に産す, 博物之友 8(53):185
——(1950), 佐用郡産蝶類及天蛾類の採集葉, 兵庫生物(4):49-51
岩村 巖(1968), 西播の蝶分布資料(6), みのう 1(1):5-8
富士原芳久(1953), 六甲に産したウスバシロ問題, Saphyrinus 1(2):23
小林賢三〔桂助〕(1930), 六甲山の蝶相, 関西昆虫学会々報(1):69-73
松井俊公(1953), 兵庫県宍粟郡(中西部)の蝶(1), すずむし 3(3):20-25
西村公夫(1967), 播州高原の蝶類について, 兵庫生物 5(3/4):222-229
奥谷禎一(1955), 但馬(兵庫県北部)の好採集地, 新昆虫 8(5):16-20
高見 裕(1953), 六甲でウスバシロが採集された, Saphyrinus 1(2):19
〔高野鷹藏〕(1906), 鳥取に新発見の蝶類, 博物之友 6(33):231
山本広一(1954), 播磨雪彦山の蝶, 兵庫生物 2(4/5):226-227, 215
——(1955), 兵庫県氷ノ山夏の蝶, 虫同友会研究報告(1):49-54
——(1966), 兵庫県下のウスバシロチョウ, MDK News 18(2):22-26
——・吉阪道雄(1958), 兵庫県産蝶類目録(1), 兵庫生物 3(4):228-236
吉阪道雄(1953), 六甲山のウスバシロチョウに寄せて MDK News(28):5